

古賀郷土史研究会通信

発行日

令和6年 11月15日

通信 (第21号)

郷土の地名のはなし 「古賀」の地名由来

「古賀」の地名は昔、古賀村という小さな村から起っています。古賀村は花鶴川の河口にあり、海岸に沿った所がありました。古賀村は戦国末期頃に集落が出来たと考えられ、最初の記録は筑前国領主、小早川隆景時代に「差出前之帳」に「田十三町三反余、米百十七石」と石高が記録されています。

古賀の地名由来を考えると、「カガ」又は「クガ」から発生したと考えられ、「カガ」は「欠(カ)、処(ガ)」の意で、崩壊地形を表わしています。一方、「クガ」は「空閑」、「陸」の意で、「空閑」は開拓されない土地を意味しています。「陸」は海・川・沼などの水辺から高くなった陸地を意味しています。鎌倉・室町時代の古賀の地形は、大きく広がった花鶴河口から海辺に沿った「陸地」(クガ)が広がっていたと地形と考えられます。昔は海岸に広がった、何もない荒れ果てた地形あったと考えられます。その後、人々が住み始めるようになったと考えられます。(飯島勇一郎)

古賀橋の横にある飯田地蔵尊

古賀神社の近くに古賀橋がありますが、昔は飯田橋と呼ばれていました。その橋の脇に地蔵堂があり、稲屋北部四国千人参りの四番札所の別院となつています。地蔵堂は飯田地蔵尊と呼ばれ、今でも生花が添えられ地元では大切にされています。

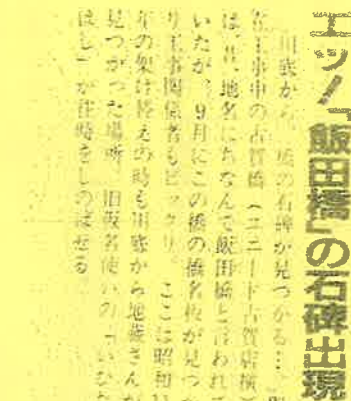


飯田地蔵尊 (四番札所別院)

「飯田地蔵由来記」によると、昭和十一年六月の頃に花鶴川の飯田橋建築工事をしていた時、梅雨のため天候が悪く、増水や事故などで難航する日々に悩まされながら工事を進めていました。そんな中、建設作業員の山口技師が睡眠中に飯田橋の角度を変更し安全を祈願すると完成するという夢を見ました。早速、山口技師は村長など関係者に相談し、飯田橋工事の変更が決定しました。しかしその後も大雨や増水

で工事は難航するばかりでしたが、八月十九日に左岸の橋げたを掘っていたところ、地中から地蔵尊板碑の下半分が発見され、翌二十日に地蔵尊の上半身が見つかりました。そこで早速、称善寺に持っていき供養してもらおうと、天気が良くなり、飯田橋の工事はとんとん拍子に進み無事工事は完了したそうです。

そこで霊験あらたかな地蔵尊として地蔵堂を造り祀りました。



エッ！「飯田橋」の石碑出現

川武が、飯の石碑が見つかる。現存する中の古賀橋(エニード古賀街橋)は、其地名にちなんで飯田橋と言われていたが、9月にこの橋の橋名板が見つかり、工事関係者もビックリ。ここは昭和11年の架け替えの時も川武から地蔵さんが見つかった場所。旧版名使の「いひたはし」が作られた時のことである。

飯田橋の石碑が出現の記事 (広報 1990年11月号)

この地蔵尊板碑は室町時代の物ではないかと言われているますが、この不思議な話題が昭和の奇跡として地元新聞の九州日報(現西日本新聞)に掲載されたと伝えています。古賀橋架け替え工事の際に「いひたはし」と彫られた橋名板が出土しています。(飯島勇一郎)

古賀市と福津市の境界を歩く

私はHKTテレビの「プラタモリ」の大ファンです。今回はそれをイメージして古賀市と福津市の境界を紹介します。江戸時代の地図を見ると古賀市は裏糟屋、福津市は宗像郡で、現在の境界線と同じと考えられる。国道3号線、495線（旧3号線）の道路沿いには両市の境界線の大きな標識がある。ところが、他の場所では全く見当たらない。例えば、地図上では境界線は花見松原を横切り、玄界灘に達するが、海岸通りには何の標識も見当たらない。地図とスマホを片手に持ち境界線（点）の目印を捜してみたい。

（便宜上、北はJR線福岡方向、南は新宮、東は西山方向、西は玄界灘方向と表示する）

①東側（西山側）の境界線（点）

清瀧寺の裏の薬師堂横の登山口から約10分です。不動岩に着く。そこから急坂を約20分で「鶴岳」（つぐみだけ）に着く。戦国時代の山城跡である。ここが福津市の舍利倉との境である。鶴岳から尾根筋を境界線と思われ赤いプラ標識沿いを約40分で「三又山」



3方の境界点、三又山

が福津市との境界線（点）である。北の福津・宗

像方面。南の新宮・久山方面、西の古賀方面の三つの交差点である。尚、三又山のピークにはプラ杭はあるが、境界線の表示は見当たらない。

②東側（西山側）と西側（玄界灘側）の境界線

江戸時代の明和9年（1772）当時の郡奉行「富永甚右衛門」や下西郷村庄屋「井原権六」は「清瀧仕掛け水」と呼ばれる灌漑用水を完成する。清瀧川から下西郷まで、約5キロの大作事であった。（約250年後の現在も1月から3月までの間、取水されている）東の清瀧から西に向かう水路は薦野の北端の雑木林の内を通り、高速道路の古賀パーキング付近で大きな導水管で渡り、「旦の原」に達する。この水路が両市の東西の境界線とほぼ一致する。薦野の北端の雑木林の内には約20基の「中原古墳群」がある。この古墳群を壊さないように水路は右に左に曲がりくねっている。



中原古墳群を流れる水路

③旦の原の古井戸跡

江戸時代の末期文久3年（1863）にこの高台に井戸が掘られた。裏糟屋郡の薦野村、筵内村、宗像郡の上西郷村、内殿村の四ヶ村の接点に位置し、村人達の努力の結晶である。当時「二郡四村に井戸一つ」と言われて唐津街道を利用する人々

に重宝された。この古井戸は現在少し南側に移動しているが、江戸時代末期の郡・村の堺の貴重な遺跡である。

④西側（玄界灘側）の境界線（点）

筵内の黒薄（くろすすき）（今の舞の里4〜5丁目）付近から流れ出す「刈目川」（かりめかわ）はほぼ境界線を西に流れている。途中で北側に蛇行するが、花見松原で南側に戻り、境界線の若干北側で玄界灘に入る。河口には小さな橋が架かっている。既述のように境界線の標識は全く見当たらない。（刈目川を境界線と定めた後に川が蛇行したのかもしれない）最後に刈目川の河口の松原の中に古賀市・福津市の境界を表示した標識がある。



刈目川の河口



旦の原の井戸跡

（文責 永留邦臣）

連絡先 古賀郷土史研究会

飯島勇一郎（会長）

☎(092)943-6850